

留学で考えさせられたお金

三重県・高田中学校 3年 松本 恵

「はい、今月分のお小遣い。」「ありがとう。」当たり前のように、まるで権利のように毎月もらっているお小遣い。友達と映画を見たり食事をしたり、文房具を買ったり——お小遣いの範囲なら自由に使ってもいいという考えで使ってしまった。お金のことについて深く考えたこともなかった。

今年の夏休み、3週間アメリカに留学することになった。ボランティアホームステイだったが、家族皆でどこかへ旅行するより、はるかにお金が必要だった。留学に支払う代金だけでなく、保険、パスポート、スーツケース、身の回りの物、服、水着など1万円札が湯水のように消えていった。お金のことなど考えたこともない私だったが、さすがに私のために、こんなにお金を使わせてしまって悪いなあという気持ちになった。

アメリカというと広大な土地に映画に出てくるようなプール付きの家——そんなことを想像しながらワクワクした気分で行った。

しかし、私のホームステイ先は、老夫婦二人きりの生活で毎月、21万円しかお金が入ってこない家庭だった。その上、ホストファーザーは、糖尿病でインシュリンを毎日打っていた。だから、電気、ガス、水を節約しなければならなかった。えらいところに来てしまったとも思ったが、こんな生活状況の中でも、ボランティアで日本人を二人も受け入れてくれた老夫婦に感謝した。

ボランティアホームステイなので私はお客さんではなく、ホストファミリーの一員としてお手伝いをして無料で宿泊させてもらっている分を返そうと考えていた。皿洗い、掃除、食事の準備など、自分に暇があれば「何か手伝うことはありませんか。」と尋ねる毎日だった。平日は午前中、英語研修があり、午後はアメリカの子どもたちとゲームを楽しんだりビーチで海水浴をしたりするなど、様々な行事がスケジュールに入っていたので、お手伝いできる時間は限られていた。また、土日はホストファミリーとずっと過ごすことができるが、私のできるお手伝いは限られたものだった。時給700円として、お手伝いしている時間は1日平均して、せいぜい1、2時間だから、お手伝いの多い日でも1,400円しか働いていないことになる。日本のビジネスホテルでも1泊3食付きで1,400円のところなんて一つもない。3週間分ホームステイでお世話になった分を私の労働力で返すことは、とても無理だと気付いた。こんな経験から働いてお金を

得る大変さを知った。そして、今回の留学も家族が一生懸命働いて得たお金があったからこそ行けたということもわかった。いつもなら、お小遣いを全部使ってしまう私だが、今回はお小遣いを残すことに重点を置いていた。欲しいと思えばすぐ買ってしまいがちな私だが、今回はなぜか進んで買う気になれなかった。結局、私は100ドル残して帰国した。家族から「こんなにもよく残すことができたね。」と誉められた。私自身がお金の大切さを身をもって知ったからだと思う。お金は大切だと口で説明されるより、自分で体験した方が、ずっとよくわかった。

このホームステイでお金で買えないものがあるということも経験した。最初の頃、他のホームステイ先の子がうらやましくてたまらなかった。「今日、買い物に行って100ドル分の服を買ってもらったよ。」「映画に連れていってもらったよ。」「野球観戦してきたよ。」そんな会話を聞く度にお金持ちの家庭でいいなあと思った。でも、うらやましいと思っただけでは3週間がつまらないものになってしまう。お金以外のことで良さを見つけようと気持ちを切りかえた。

ホストファーザーは物作りの天才だ。私たちが使っていたベッドも家具もすべて手作りだった。車もクーラーがきかず、シートも鉄骨むき出しの所もあったが大切に乘っていた。新しいエンジンにしたらまだ乗れるとホストファーザーは言っていた。本当に物を大切にしていた。電気代の節約で夜になるとリビングだけ電気をつけて、みんなでいろいろなことを語り合った。そのおかげで老夫婦ととても仲良くなれた。老夫婦の娘の家に行って、孫の誕生会をしたり、湖や魚の養殖場に連れていってもらったりした。お金がなくても私にとって最高の日々となった。

アメリカを出発する日、老夫婦は「アイラブユー」と言ってくれた。事故にあわずに無事に日本に帰れるようにと私たちを気遣ってくれた。そして、最後まで残って、私に手を振り続けてくれた。私は涙が止まらなかった。老夫婦の温かい気持ちは、どんな高価なお土産より価値のあるもので、決してお金で買えないものだと思った。この留学を通してお金は一生懸命働いて得られる労働の結晶だから大切であることを知った。一生の宝になる経験ができたアメリカ留学は、私にとって活きたお金の使い方だったと実感できた。